
時の相談者

烏羽爽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の相談者

【Nコード】

N0884Z

【作者名】

烏羽爽月

【あらすじ】

高校生の玲子は放課後いつも寄っている店がある。その店の店員である口の悪い青年は言う。「この店に客は来なくていい」と。そんな時、玲子に不幸が訪れた。
2人を取り巻く命のはかなさと人間関係の温かさを描く、現代SFファンタジー。

処女作です。更新亀ります。

お気に入りの時計店

放課後。

ホームルームが終わり、生徒たちは部活動に励んだり、教室に残って勉強に勤しんだり、友達と寄り道しながら帰ったり、みんな思い思いに過ごしている。

玲子はこの部にも所属していない、いわゆる帰宅部であつたし、学校に居残つてまで勉強をしようというタイプでもなかったのだ、いつもと同じように帰路に着いた。

今までならこのまま道草を食うでもなくまっすぐ自宅に帰っていた。けれども玲子は普段家へと帰る道から斜めに伸びている、人が2人通つてぎりぎり対向できそうなくらいの細道に入っていた。

その道は、両側を周辺の民家のものと思われるブロック造りの塀にぐるりと囲まれていて、そこを通る者を外界から孤立してしまつたかのように錯覚させる。

玲子は道をどんどん進んでいった。

しばらくして延々と壁の続いた景色が途切れ、視界が開けた。するとその広場の一角にレトロな雰囲気醸し出している一軒の店があつた。都会の喧噪から外れて建っているその少し浮き世離れた建物の存在は、ここに来る者にまるで異世界にでも迷い込んだかのように思わせた。

その店には、『佐藤時計店』という文字が刻まれた看板が掛けられていた。

玲子がこの店を見つけたのはほんの一週間ほど前だつた。

その日の放課後、いつものように下校していたとき、ふと寄り道をしたいた衝動に駆られた。そこでさっきの細道に入ってみることにしたのだつた。玲子は以前からその道がどこにつながっているのか

気になっていたし、少しいつもと違う道を通るだけでなんだか冒険をしているようでわくわくした。

そして細道を抜けてたどり着いた先で、この『佐藤時計店』を見つけたのだった。

それから玲子はこの時計店を気に入り、放課後毎日訪れていた。

玲子は木で出来た扉を開けて店の中へ入った。

「こんにちはー」

『佐藤時計店』という名前通り、店の中にはあの歌に出てきそうな大きくてごつい古そうな時計や、この店の落ち着いた雰囲気にぴったりの茶色い革ののベルトの腕時計たちが、チクタクと心地よいリズムを刻みながら所狭しと並べられている。玲子はこのいつも生活しているものとべつのじかんにを旅しているような、静かで温かい雰囲気をとても気に入っていた。

一番に彼女を出迎えたのは、雪のように真っ白な体で首に鈴の着いた赤い首輪をした一匹の猫だった。

「こんにちは、シロちゃん」

そう声をかけると、この店の看板猫であるシロはにゃーと一度鳴いてから、鈴の音を響かせながら店の奥へ行ってしまった。

「いらっしやい玲子ちゃん。毎日よく飽きずに来るね」

シロと一緒に奥から出てきた男はこの店の唯一の店員であり、時計職人だった。名を時雨しぐれという彼は、まだ二十代真ん中から後半くらいに見えるのに、1人でこの店を切り盛りしているようであった。スラッとした長身で顔立ちも整っている。そして優しい笑みをその顔に浮かべていた。

「今日もすばらしい営業スマイルですね、時雨さん！」

玲子がつこり笑って元気いっぱいにそう言くと、途端彼の顔が

黒さを帯びた無表情に変わる。

「大声でいうんじゃないよ。ほかに客がいたらどうしてくれんだ、あ？」

「いいじゃないですか、別に。心配しなくてもいつも私しかお客さんいないんだから」

「そうか、そんなにしばかれてーか」

時雨はそう言いながら拳をポキポキ鳴らしている。口調だけ聞いていればどこの不良だよ、と突っ込みたくなる。今の時雨には先ほどのまでの優しそうな笑顔と雰囲気は微塵も感じられない。本当に同一人物か疑いたくなるくらいだ。彼は店にお客さんがいるときは
とはいえ玲子が言ったように滅多に客など来ないのだが、さつきまでの営業スマイルを顔に張り付けていかにも人が良さそうで爽やかな好青年を演じているらしい。

しかし、玲子に至っては油断でもしたのか彼女がこの店を見つけた次の日にはすでにばれてしまっていたのだが。

不意に時雨は玲子の後ろ、店の入り口である扉のある方を見つめた。彼だけでなくシロもその辺りをじっと眺めている。

何かあるのだろうか、と玲子も視線の先を見るべく振り返った。が、変わったものは何もなく、ただ入ってきたときと同じように扉があるだけだった。

「客が来なくても別にいいんだよ、この店は」

玲子はしばらく頭上にはなマークを飛ばしながらきよきよと辺りを見回していたが、時雨が呟いたのを聞いて彼の顔を見た。

彼はいつも通りの無表情だったが、玲子には一瞬、彼が営業スマイルとは違い心から慈しむように微笑んでいた気がした。しかし次にはもういつもの表情に戻っていたのと、彼の性格からして程遠い表情だったため見間違いだろうと思うことにしたのだった。

「何言ってるんですか、お客さんいないと商売成り立たないでしょ

う！諦めちゃダメですよ！」

「諦めてるとかじゃねーし。つかガキが商売語ってんじゃねーよ」
何となく沈黙に居心地の悪さを感じた玲子は、時雨の言葉をあえて冗談っぽく捉えてみた。すると彼がいつもの調子で返してきたので玲子は少し安心したのだった。

そうこうしているうちに時間も遅くなってきたので、玲子はそろそろ家に帰ることにした。帰り支度をして扉の前で時雨に声をかける。

「また明日も来ますね。時雨さん、シロちゃん、さよーなら」

そう言って扉の向こうに消えた玲子を見送った後、時雨はしばらく扉を見つめてぼつりと呟いた。

「……………寧ろこの店には客なんて来てくれない方がいい」

言った彼は声色こそいつもと変わらず淡々としたものだったが、その表情は痛みを我慢しているような、それでいてどこか淋しそうなものであった。

お気に入り時計店（後書き）

初めて小説書きました。拙い文章ですがよろしくおねがいします。
パソコン入力と話考えるのがマイペース、というか遅いので更新が
停滞すると思われませんがご了承ください。

突然の不幸

次の日の午前最後の授業で、子守唄と言っても過言ではない先生の話聞きながら、私は欠伸をかみ殺した。

ふと窓の外に目を向ける。今の季節は秋。校舎の3階にある私の教室からは、ほんのり色づき始めた校庭の木々がよく見渡せた。毎朝下駄箱からの遠さを恨めしく思っではいても、この窓から見える景色は結構好きだったりする。

紅くはなつてきているが、まだ見頃とはいえない木々をぼんやりと眺めていた私の脳裏に、幼い頃から親友と毎年見ていた、枝を大きく広げる色鮮やかな紅葉^{もみじ}が浮かんだ。

そういえば、中学の途中くらいからだろうか、2人共忙しくて見に行かなくなってしまうていた。今度誘ってみようかな。そんなことを考え、私は再び眠くなるような授業に耳を傾けながら、なかなか進まない時計の針を気にするのだった。

昼休みには毎日、親友の麻奈美と2人で弁当を食べていた。今日もいつもと同じように、授業が終わった後彼女が私の席にやって来て、前の机を私と向かい合わせになるように移動する。

麻奈美とは小学生の頃から仲が良く、小・中・高とずっと同じ学校に通っている。小学校一年生の時に、私たちが住んでいる町の近くにある山に遊びに行った。その山は比較的小さな山で、道が舗装されていて遊歩道のようになっており、子供でも登るのは難しくなかった。そのため、近所の小学生たちにとって、絶好の遊び場となっていたのである。

登り切った先には、休憩できるように屋根の着いたベンチがあり、そばに一本の大きな紅葉の木が立っている。その紅葉を毎年2人で見に行くのが、私の毎年の楽しみだった。とはいえ最近はどう行か

なくなってしまったのだけど。

「さっきの授業、すごく眠かったあ。危うくシャーペン落としそうになっちゃったし」

弁当を食べながらたわいもない話をしていたとき、私は意を決して尋ねてみた。

「そういえばさ、麻奈美は土日ひま？」

すると彼女は暫く考える風にして言った。

「ごめーん！土曜も日曜も部活があるんだよね」

彼女はバレー部に所属している。この学校のバレー部は練習が厳しいことで地元では少し有名だった。休日も練習があつて忙しいのだろう。

「…そつか、しょうがないね」

「ほんとごめんねー」

「いやこつちこそ忙しいのにごめんね。久しぶりに遊びたいなーと思っただけだから」

そういえば、今までもこんな感じで行かなくなつてたんだっけ。でも仕方がない。小学生の頃と違って遊ぶ暇がなくなっちゃってるのは確かだし。もうあの頃みたいに麻奈美と紅葉を見ることはないのだろうか。そう考えると少し寂しかった。

そんな気持ちを隠すかのように、私は再び弁当を食べながら世間話に花を咲かせるのだった。その頃空は幾重にも重なった暗雲が太陽の光を遮り、辺りを少し薄暗くしていた。

その日の放課後も玲子は佐藤時計店に向かつていた。しかしあの紅葉のことを思い出したからか、いつもよりも気分が沈み考え込んでいたので、他の下校している生徒や道を走る車の音も耳に入りづらくなっていた。

もう二度とあの紅葉を見に行くことはなくなるのだろうか。もう
いつそのこと1人で見に行ってしまうおか、いやいつかきつとまた
2人で見に行けるはず。

そんなことを考えながらとぼとぼ歩いて、あの細道の手前の交差点
まで来た。

さっきも言ったように、玲子は深く考え込んでいたため周りの音が
聞こえなくなっているに相違なかった。だから彼女は確かに歩道の
信号が青になってから歩き出したのだが、赤信号にも関わらず突
っ込んでくる車に気がつかなかったのだ。

プアアアアアア

けたたましい車のクラクションの音が聞こえたのを最後に、玲子
は意識を手放した。

どこか遠くの空で一筋の稲光が走った。

突然の不幸（後書き）

ありがとうございました。

ショートストーリーになる予定です。

更新遅くなってすみません。

本性と理由

いつもならそろそろ玲子が店に訪れる時間だろう、と店の扉を見ながら作業している手を止めて時雨は思った。

いつの間にか外では雨が細く霧のように降っていた。

本当は来ない方がいい。この店は本来玲子みたいな人間が来るような場所じゃない。時雨は視線を手元に戻し仕事を再開した。

それから暫くの間時雨は時折シロの相手をしながら仕事を続けていたのだが、不意にまた扉に顔を向けた。シロもまた扉の方向を見た。

そこに立っていたのは玲子だった。しかし不思議なことに彼女が扉を開ける音も誰かが近づいて来る足音も聞こえなかった。ああ、やはり。

「考え事しながら歩いてたら、いつもより遅くなっちゃいました」
彼女はそう言って少し困ったように笑った。時雨は彼女を見つめたまま、だがその言葉には答えない。

外は雨が降っているにも関わらず、彼女は少しも濡れている様子はなかった。雨は決して強くはならず、弱いままじんわりと大地を濡らし続けている。

暫くの沈黙が過ぎ、時雨は漸く口を開いた。

「もう生きていないのか……」

そう言うとき玲子は笑顔を若干強張らせてこくりと頷いた。

「時雨さんには幽霊が見えるんですね」

幽霊。自分で言っても全く実感が湧かない。なので涙も出なかった。

つい数十分前に起こった事故で玲子は命を落としてしまったのだ。

「ここに来る途中に事故に遭って……、だからですかね？何となくここに来ちゃいました」

「それはちがうよ」

「？」

一瞬、玲子にはどこから声が聞こえたのか分からなかった。この場にいるのは玲子と時雨だけで、さっきのは時雨の声ではない。彼はと言えば、声など聞こえなかったかの様に平然としている。

「レイコはレイコじしんのいしでここにきたわけじゃないよ」

再び発された声が聞こえた方向を見ると、そこにいたのは白い猫だった。玲子は目を見張った。

「今の、シロちゃん？」

そう聞くとその白猫は悪戯っぽい笑みを浮かべた。かのように、玲子には見えた。

「びつくりした？ぼくはふつうのねこじゃないんだ。うんとながいきして“ねこまた”になったのさ」

猫又というのは、猫が長生きして尾が2つに分かれ、よく化けると言われているもののことである。しかしシロの尻尾は2つに分かれている様子がない。

するとシロは玲子の視線に気付いたのかその長い尻尾を一振りした。次の瞬間にはシロの尻尾は2つに分かれていた。

玲子はびつくりして思わず尻尾を凝視した。見間違いなどではなく、確かに2本あるそれは自由気ままに揺れている。

「いっただろ、ねこまただって。しつぽがふたつあるのなんてふつうさ。……それでレイコがここにきたのはきたかったからじゃなくて、このみせがレイコをよびよせたんだ」

どうということだろう。

玲子がこの時計店を見つけたのは確かにその場の思い付きだったが、しかし自分の意志であの道を通ったと彼女は思っていた。

あの日彼女が何となくあの道を通ったのは、偶然ではなく必然だったと言いたいのだろうか。

「この店は死期の近い人間が訪れる場所だ。ここを訪れた者達は死後再び店に来る。たいていの奴は何か悩みを抱えていて、ここに相談に来るんだ」

それまで険しい顔をして押し黙っていた時雨が、ここにきて口を開いた。

「時計職人つづーのは俺の表向きの仕事。実際はここに来る死者達の相手をしてるってわけ」

「それで、どうしてきみはここにきたの？」

シロにいきなり話を振られて、玲子は少し狼狽えた。彼らの話から察するにつまり玲子も悩みを抱えているということだろう。とすると、やはり事故に遭う直前まで脳内を占めていたあれか。

「…………死んじやったってことは、もう親友と遊ぶことが出来ないんですかね？」

くだらない話をして笑い合うことも2人で並んで歩くこともいっしょに紅葉を見に行くことも、もう出来ないのだろうか。

最近休日に2人で遊んだりすることが少なくなったが、またいつかお互いが忙しくないときに紅葉を見に行くだろうと思っていた。今は無理でもいつか、きつと。遊べないことを嘆いてはいても、心の奥底では二度と遊べなくなる日なんて来ないと思っていたのに。

本性と理由（後書き）

微妙なところで終わってしまいました。

次は少し短くなるかもしれませんが。

バランス悪くて申し訳ないです……。

ありがとうございました。

救いの手

玲子が泣きそうになるのを堪えていると、一度シロと顔を見合わせた後時雨が話し出した。

「いや…、この店に来店した客であるお前の悩みを出来るだけ楽にしてやるのが俺の仕事だ。玲子、お前に1日だけ時間をやる。それを使ってその親友とやりに別れを済ませて来い」

玲子は耳を疑った。彼女はもう二度と麻奈美と遊べないのかと彼らに問いはしたが、本心では完全に諦めていて期待などしていなかった。

「そ、そんなのどうやって……」

「ぼくらにはできるんだ。ときをあやつれる。あたえてあげられるじかんはかぎられているけどね」

なんて非現実的なだろう。そもそも今の玲子の存在自体が現実的とはいえないのだが。死者の悩みを聞くとと言っても、カウンセリングのようなことをするのだと思っていた。

玲子は死期間近の人々がこの店に引き寄せられる理由がほんの少しだけ、わかった気がした。

この店は、ここの人達は、死してなお心残りを持つ自分に救いの手を差し延べてくれる。

「俺達がお前に与える1日の間は他の人間にもお前のことが見えるし話せる。死ぬ前と何も変わらんねー状態だ。ただし向こうにはお前が死んだことは一時的に忘れてもらってるからくれぐれも気をつけろよ。ぼろを出して相手に違和感を感じさせるんじゃねーぜ。ばれるからな」

「もとに戻るにはどうすればいいんですか？」

「そのときがくればしぜんにもとにもどるさ。きみはこころおきなくじょうぶつできるようにきみのともだちとおわかれをしてくるだけでもいいんだよ」

ついに麻奈美と今生の別れになるのだ。それなりの覚悟をしていかなばならない。

もしこの店を見つけていなかったら、心残りがあるまま成仏していたかもしれない。いや、成仏すら出来ていなかったかもしれないだろう。玲子はこのに来れたことをとても幸運に思った。

「それじゃ、心の準備はいいか？」

「えっ、もしかして今からですか？」

「当たり前だ。ぐずぐずしてたってどうしようもねーだろ。第一、他にすることがない。」

言われてみればその通りだ。玲子はおとなしく腹を括ることにした。

深く、ゆっくりと深呼吸をする。

「よし、送るぞ。」

時雨は指をぱちんと一回鳴らした。すると店にあるたくさん時計たちが一齐に、しかし速度はばらばらに回りだした。と同時に、玲子の体がだんだん淡い光に包まれていく。それはまるで内側から温かくなっていくような、不思議な感覚だった。

彼女が光に包まれたまま、みるみるうちに薄くなってついに消えてしまう直前に、シロは言った。

「ぼくたちもどこかでみまもっているからね。いつてらっしゃい」

玲子はその言葉に勇気をもらい、すっきりした表情で最後の一日に旅立っていった。

店の窓から覗く空は、さっきまでの雨が嘘のように青く広々と澄み渡っていた。

救いの手（後書き）

やはり短くなってしまいました。
すみません。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0884z/>

時の相談者

2012年1月14日19時48分発行